

氏 名	ひえ だ おさむ 稗 田 乃
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 490 号
学位授与の日付	平 成 17 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ナイル諸語比較研究の諸問題 ——ナイル語西方言における名詞の語形成法を中心に——

論文調査委員	(主 査) 教 授 庄 垣 内 正 弘	教 授 佐 藤 昭 裕	教 授 梶 茂 樹
--------	------------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、いまだ、誰も成し遂げることができないでいるナイル祖語の再構成を、音韻体系を中心に、試みるものである。再構成を試みるにあたって、検証可能な方法が用いられるべきであることを主張する。

東アフリカに、北からスーダン南部、ウガンダ、ケニア、北部タンザニアにかけて、さらに、エチオピアとコンゴにも広がって、同系統であると考えられる1群の言語が存在する。これらの言語は、ナイル諸語と呼ばれる。

第1章は、ナイル諸語に属する言語の、地理的分布、話者数、子音体系、母音体系など、概説と、本研究の目的、方法論、さらに、先行研究の概観を行う。

ナイル祖語を再構成することに正面から取り組んだ先行研究は存在しないのだが、関連する先行研究が若干、存在する。例えば、ナイル諸語の下位方言であるナイル語方言の祖語を再構成する試みや、ナイル諸語が属するナイル・サハラ言語ファミリーの祖語を再構成する試みである。これらの先行研究は、形態論の取り扱いが十分ではないために、間違った音韻対応から、間違った再構成を行っている。この章では先行研究が犯した間違いを指摘する。そして、その間違いを克服するためには、形態論の再構成を避けることができないことを主張する。

ナイル諸語に所属する言語の概説は、「言語学大辞典」(三省堂)に筆者が書いた概説に基づいている。

第2章は、ナイル語西方言からみた、ナイル祖語における名詞の複数形成法を再構築することを試みる。音韻体系を再構成するには、形態論の再構成が不可避であることを証明するために、まず、名詞の複数形成法を再構成するのである。

先行研究は、名詞の形態論を明らかにせずに、音韻対応を探し求めた。例えば、ある言語の名詞の単数形に、別の言語の「単数 (Singular) 形」を比較したり、ある言語の複数形に、異なる形成法による別の言語の複数形を対応させたりした。その結果、間違った音韻対応表が作成され、そこから導かれた再構成は、間違ったものであった。

正しい音韻対応を見つけるために、例えば、名詞を比較方法に用いるとすれば、名詞の形態論が明らかにされなければならない。ナイル諸語に属する言語は、名詞は語幹と接尾辞から構成されている。接頭辞を発達させた言語も存在するが、接頭辞は、数の区別に直接、関与しない。また、接頭辞の発達も、それぞれの方言、言語に限定され、ナイル祖語にまで遡るものではない。したがって、語幹の形式と接尾辞と、そして、接尾辞の接辞の仕方と接尾辞の接辞に伴う音韻規則を明らかにしなければ、比較方法に用いる形式を確定することができない。

Hieda (1986), 'Plural Formation of Nouns in Western Nilotic' がナイル語西方言の名詞の形態論を扱ったのに対して、本研究の第2章は、そこでの発見と考え方を発展させ、さらに、ナイル語東方言と南方言の名詞形態論にまで言及したものである。

第3章は、ナイル語西方言から見た、ナイル祖語再構成音 *r₁, *r₂, *l₁, *l₂を議論している。また、ナイル語西方言をこえて、ナイル祖語にまで遡る再構成を試みる。

議論の出発点は、第2章の複数形成の議論にある。第2章の議論は、ナイル諸語の複数形成を共時的な観点から解明することに重点を置いている。第2章では通時的な説明はできるだけ限定的に用いた。

先行研究において「t-複数形」、「k-複数形」と呼ばれ、不規則形式として扱われた複数形は、実は、第2章で明らかにした複数形成法により規則的に説明できる。ただし、そのためには、ナイル語西方言の祖語再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2 の存在を認めなければならない。逆に言えば、第2章においてナイル諸語の複数形成法が明らかにされた結果、ナイル語西方言の祖語再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2 を想定することが可能となったのである。さらに、ナイル祖語にまで溯って、再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2 を想定することにより、先行研究においては起源を同じくすると考えられていなかった形式を、例えば、「ミルク」や「動物」といった形式を、起源を同じくする形式であることを明らかにした。

第3章は、Hieda (1989), 'Proto-Western Nilotic *r and *l' を改訂し、加筆したものである。この論文は、再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2 をナイル語西方言の祖語にまで溯って、証明したが、本研究の第3章においては、再構成音をナイル祖語にまで溯れることを明らかにした。

第4章は、ナイル祖語に「単数 (Singular) 形」の形成法が存在したことを証明し、「単数 (Singular) 形」の形成法を再構成することを試みる。第4章は、第3章以上に議論は通時的な観点から進められている。

複数形より単数を表示する形式が形態論的に有標である場合に、単数を表示する形式を「単数 (Singular) 形」と呼ぶ。単数形と複数形を形態論的に区別する言語の場合、普通、単数形が無標で、複数形が有標であることが多い。しかし、自然界で集合して存在するのが当然であるモノ（例えば、人間だとか、動物など）を指示するとき、複数形が形態論的に無標で、特別に単数を指示する場合に形態論的に有標の形式が用いられることがある。

ナイル諸語に属する言語は「単数 (Singular) 形」の形成法をもっているが、しかし、同じモノを指示する名詞がどの言語においても「単数 (Singular) 形」をもつわけではない。例えば、「家畜」を意味する名詞は、ナイル諸語に所属する大抵の言語が単数の「家畜」を指示するために、「単数 (Singular) 形」を用いる。しかし、「人」を意味する名詞は、ナイル語東方言と西方言に所属するほぼ全ての言語は、ナイル祖語の「単数 (Singular) 形」に溯る形式を保存するが、ナイル語南方言に所属する言語は、ナイル祖語に溯る「単数 (Singular) 形」を保存しない。あるいは、「水」を意味する名詞の場合、ナイル語東方言に所属するバリ語とロツホ語の一部の方言だけが、ナイル祖語に溯る「単数 (Singular) 形」を保存し、それら以外のナイル諸語に属する言語は、「単数 (Singular) 形」を保存しない。どんな名詞が「単数 (Singular) 形」を保存したかは、言語それぞれで異なっているのである。

先行研究は、これらの「単数 (Singular) 形」に気づくことはなかった。そして、単数形と「単数 (Singular) 形」を比較することにより間違った音韻対応を引き出した研究も存在した。あるいは、先行研究は、「単数 (Singular) 形」を不規則形として扱ったため、実りある結論を導くことに失敗した。

第4章は、Hieda (2003), 'On Singular in Nilotic (in Japanese)' を改訂したものである。ナイル祖語に再構成された「単数 (Singular) 形」形成法は、接尾辞の語幹への付加と、それに伴う語幹末尾の位置での有声閉鎖音の鼻音化を特徴とする。したがって、結果的に、語幹末尾の位置における有声閉鎖音と、それが鼻音化された鼻音が、ナイル祖語に再構成されることになる。

第5章は、ナイル祖語において、名詞はその音素配列的構造から2つの類に分類されることを証明した。ナイル語西方言を除く、東方言と南方言に所属する言語は、名詞は、形態論的に2つの類に分類される。1つは、CVC の音素配列的構造をもち、他方は、VCVC の音素配列的構造をもつ。

ナイル語西方言は、名詞における2つの類の区別を失っているが、実は、無声閉鎖音の音韻対応からナイル語西方言にもナイル祖語の時代における2つの類の区別が、無声閉鎖音の出現の仕方に反映していることが分かる。名詞がナイル祖語の時代に VCVC 構造をもつ場合、ナイル祖語に再構成された無声閉鎖音は、語幹初頭の位置において、ナイル語西方言においては有声閉鎖音で出現する（暫定的に CVC を語幹と定め、それに先行する母音を「語幹に先行する要素」と名付けた）。一方、名詞が CVC 構造をもつ場合、再構成された無声閉鎖音は、語幹初頭の位置において、ナイル語西方言においては無声閉鎖音で出現する。

先行研究は、無声閉鎖音に2種類の対応が存在することは気づいていた。つまり、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音にナイル語西方言の無声閉鎖音が対応する場合と、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音にナイル語西方言の有声閉鎖音が対応する場合が存在する。先行研究の中には、上記の事実からナイル祖語における閉鎖音に有声と無声の対立を疑うものも

あった。しかし、実は、これら2種類の対応は、語幹の音素配列的構造の違いを反映しているのである。

第5章は、Hieda (1986), 'Some Historical Changes in Nominal Stems in Nilotic Languages' を大幅に改訂したものである。しかし、基本的な考え方は変えていない。

上記のことから分かるように、第5章は、名詞語幹の音素配列的構造の変遷をナイル祖語から各方言へ跡付ける試みである。しかし、結果的に、ナイル祖語における、語幹初頭の位置での無声閉鎖音を再構成する試みでもある。

第6章は、ナイル語南方言に所属するキプシギス語の下降型声調の起源を探るものである。キプシギス語の下降型声調は、ナイル語南方言の祖語にまで溯ることができる。さらに、ナイル語南方言の祖語に溯る下降型声調は、ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音の存在を証明する。

ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、ナイル語南方言において弱化し、声門摩擦音を經由して、さらに、二重母音の要素や、長母音の要素になった。声門摩擦音は、先行する母音の声調を下げる効果をもっている。高声調は、声門摩擦音の影響により下降声調で発音された。語幹末尾の位置で、閉鎖音は無声と有声の対立を失うかわりに、先行する母音の下降型声調を、言語的対立を行うものとするにより、下降型声調の発達を促した。もちろん、現在話されているナイル語南方言は、閉鎖音に無声と有声の示差的対立を失っている。

このように、第6章は、キプシギス語の下降型声調の起源を探る試みであるが、結果的には、語幹末尾の位置におけるナイル祖語の有声閉鎖音の存在を証明するものである。

第6章は、Hieda (1996), 'Origin of a Falling Tone in Kipsikiis' に加筆したものである。

第7章は、ナイル語南方言に所属するダトーガ語において閉鎖音に無声と有声の示差的対立が存在しないことを証明した。第6章で分かったように、ナイル語南方言は、ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音を弱化させ、その結果、閉鎖音の無声と有声の示差的対立を失ってしまった。しかし、先行研究は、ダトーガ語（ナイル語南方言）がもっている音声的には有声で発音される閉鎖音を、説明することができなかった。そのために先行研究によるダトーガ語の表記には、有声閉鎖音と無声閉鎖音が書き分けられていた。

本研究の第7章により、先行研究の不適切な記述を訂正することが可能となった。また、ダトーガ語の従来記述が、第6章で主張した、ナイル語南方言におけるナイル祖語に再構成された有声閉鎖音の弱化と、閉鎖音の無声と有声の対立の喪失に関して、論証の妨げとなっていたが、本研究によりその妨げを取り除くことが可能になった。

第7章は、Hieda (2000), 'Some problems in Datooga (Bajuuta dialect) consonantal system' を改訂したものである。

最後に、本研究は、ナイル諸語の名詞の複数形成を扱った第2章、「単数 (Singular) 形」の形成法を扱った第4章、名詞語幹の音素配列的構造の変遷を扱った第5章のように形態論を扱っているが、実際は、それらにより、結果的には、ナイル祖語の子音体系を再構成することとなっている。

第3章では、名詞の複数形成を明らかにすることから生じた、不規則な複数形成を説明することにより、ナイル祖語再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2が再構成された。第4章では、名詞の「単数 (Singular) 形」の形成法を明らかにすることにより、ナイル祖語に語幹末尾の位置における有声閉鎖音と、それが鼻音化された鼻音を再構成した。第5章では、語幹構造の変遷を明らかにすることにより、語幹初頭の位置におけるナイル祖語の無声閉鎖音を再構成した。第6章では、キプシギス語の声調体系の発展を明らかにすることにより、語幹末尾の位置におけるナイル祖語の有声閉鎖音の存在を証明した。

形態論の再構成や、声調体系の再構成とみられる論考が、実は、音韻体系（子音体系）の再構成を試みるものであった。音韻体系の再構成がただ音韻対応から試みたものであれば、その再構成の是非を検証することは容易でない。そのことは、従来のナイル語東方言の祖語を再構成しようとした試みや、ナイル・サハラ言語ファイラムの祖語を再構成しようとした試みを検討すると明らかである。本研究は、従来のナイル祖語再構成の試みを正しい方向へと導くものである。

論文審査の結果の要旨

アフリカ大陸で話されている言語は通常4つの語族に分類される。各語族の歴史言語学的研究は、言語調査をふまえた文法記述を優先させて行われるので、全体的に進展の度合いは大きくない。とりわけナイル・サハラ語族の研究は他の3語族に比べて大きく立ち後れている。本論文はナイル・サハラ語族のシャリ・ナイル語派に所属するナイル語の比較言語学的研

究を目的としたものである。ナイル語は西、東、南の3方言に区分される。本論文では西方言における名詞の語形成法を中心に、形態、音韻比較を行い、西方言からナイル語全体に拡大する方法をとって考察している。

ナイル語の比較言語学的研究はこれまでも行われてきた。しかし、いずれも不十分な形態分析に基づく不確かなデータを頼りに音韻比較が繰り返され、再構された音形式の多くは信頼できるものではなかった。論者はこのような先行研究を丹念に検討し、語構成分析と形態比較を重視し、その上で適切な音韻対応を行った。この比較言語学のふつうの方法が論者によって初めて適切に採用されたことは、ナイル・サハラ語族の通時研究の後れを示すものである。だが、同時に無文字言語の研究の主流が言語調査と文法記述とにあることを示すものでもある。ここでの論者の研究も自身が長年にわたるフィールドワークで蓄積した大量のデータを利用して行われたものである。

本論文は7章から構成され、A4和文477頁の分量をもつ。本論文の内容は以下のように要約できる。

第1章「序論」ではナイル語に所属する各方言を略述し、第2章以下の議論に必要となるそれぞれの音韻体系を提出している。

第2章は本論文の中核となる部分で、ナイル語西方言における名詞の複数形成法について論じている。ナイル語の名詞複数形成法は複雑で、先行研究においては単数と複数の区別が十分に行われず、音韻対応を導く過程で本来の接辞が語幹の一部として分節され、しばしば誤った再構音が提出されてきた。論者は複数形成法をナイル語西方言に所属する17種の言語について考察し、西方言祖語から現在にいたる形成法の変遷を下位方言全体に通用する変化規則の体系で表示した。規則は形態論、形態音韻論、音韻論のレベルの変化を含み、各言語形式がどのような変遷を遂げて現在に至ったのかが明瞭に説明されている。規則の中にはまれにアドホックの観を免れないものも見られるが、古文献をもたない言語の比較においては許される範囲のものであり、変化の過程を大きく歪める程のものではない。

第3章では複数構成法の再構に際して推定されたナイル語西方言の再構音 *r1, *r2, *l1, *l2 について議論する。まず、論者はこの再構音がナイル祖語にも存在したと推定し、次にその推定をもとに第2章で論じたナイル語西方言の複数形成法をナイル語全般に適用させることによって、先行研究でいわゆる「t 複数形」「k 複数形」と呼ばれ、特異な不規則形式として扱われてきたナイル語の複数形式が実際には規則的な形式であることを証明した。証明の過程に矛盾はなく明快な記述といえる。

第4章ではナイル語における「単数形」(Singulative)について論じられている。ふつう言語は単数表示より複数表示に複雑な形態を示す。しかしナイル語においては無標の複数表示に対して単数表示が有標の形式をもつものが見られる。論者はこの「単数形」の形成法が既にナイル祖語時代に存在したとし、その形成法を再構した。祖語の形成法はいろいろのかたちで現代方言に反映されているが、語の内容によってその反映の仕方に異なりのあることを指摘している。すなわち同じモノを指示する名詞の「単数形」使用が方言によって異なった分布を示している。たとえば、「家畜」を意味する名詞はナイル語の大概の方言で複数表示が無標形式として現れ、単数表現に有標の「単数形」が現れる。しかし「人」を意味する名詞は、ナイル語東方言と西方言ではナイル祖語の「単数形」に遡る形式を保存するが、ナイル語南方言では保存されていない。

ナイル祖語における「単数形」形成法の再構は納得のいくものである。ただ、名詞の内容と「単数形」の適用との関係にかんする説明には不備なところもある。

第5章では、ナイル語における名詞語幹のタイプとその変遷について論じられている。論者は、名詞語幹が音素配列論的構造からナイル祖語において2種に分類できると主張する。ナイル語東方言と南方言は形態構造上、名詞語幹はCVCとVCVCの2種に分かれる。一方、ナイル語西方言ではこの区別は失われているが、無声閉鎖音の出現の分布と、他の方言との対応関係から西方言においてもこの2種の区別がかつては存在したという推定を行った。すなわち、ナイル祖語のVCVC構造をもつ名詞において、第1子音の無声閉鎖音はナイル語西方言では有声閉鎖音に反映され、CVC構造をもつ名詞では第1子音の無声閉鎖音はナイル語西方言の無声閉鎖音に反映されるとする。

論者の主張に無理はなく、この2種の名詞語幹タイプの存在が語彙・音韻比較に大きな役割を果たすことになる。

第6章ではナイル語南方言に所属するキプシギス語の下降型声調の起源について論じられた。論者は、ナイル語南方言の祖語に遡るキプシギス語の下降型声調が、ナイル祖語に再構された有声閉鎖音に由来すると主張した。そして下降型声調への変遷の過程を、ナイル祖語の有声閉鎖音がナイル語南方言において弱化し、声門摩擦音を經由して、二重母音や長母音の

要素に変化したものとする。声門摩擦音は先行する母音の声調を降下させる役割を果たすので、本来の高声調が下降声調に変化し、その結果語幹末位の閉鎖音は声の対立を失い、代わりに、声調の対立を発達させたと推定する。

論者の意見は興味深いものであり、推定の大筋は容認できるものである。難をいえば変遷の過程にもうすこし詳しい説明が欲しかった。

第7章ではナイル語南方言に所属するダトーガ語の子音体系について論じられている。先行研究で議論されてきた閉鎖子音の声の対立の有無の問題について、この対立が存在しないというここでの論者の意見は筋の通ったもので評価できる。しかし、この章は本論文の中ではむしろ付録に近い内容といえる。

以上、本論文の内容について要約した。ナイル語の比較言語学的研究において、先行研究が形態論的分析を十分に行わず、不正確な形態による音韻対応例の羅列と安易な再構音の提出に終始してきたのに対し、論者の比較方法はむしろ形態論上の比較による語構成分析を優先させ、その分析に基づいて音韻比較を行っているといえる。名詞の複数形成、「単数 (Singulative)」の形成法、名詞語幹の音素配列的構造の変化など、形態論の考察からはじめて最終的にはナイル祖語の子音を推定し、その体系を再構している。このような方法による論者の研究結果がナイル語のみならずサハラ・ナイル語族、あるいはアフリカ諸語研究に与える影響は大きいといえる。

本論文は内外の雑誌に発表された7本の論文内容をまとめたものであり、すでに各章の内容はそれぞれに高い評価を得ている。しかし、本論文には上にも触れたように欠陥もある。とりわけ言語変化の過程で一見アクロバティックに思える規則の適用は読者を不安にさせる。もうすこし、丁寧な説明がなされるべきであった。また、文章にぎこちないところもある。これは論者自身の英文論文を安易に和訳したためと思われる。だが、これらの欠陥が本論文の価値を大きく損なうことはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年5月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。